



左から筆者、佐藤陽子さん
鈴木先生、宮沢進先生

私にとっての才能教育

(東京外国语大学教授)
(国際関係論・現代中国学) 中嶋嶺雄

才能教育の成果が一堂に花開く恒例の全国大会二十五周年を記念するレセプションが、三月十七日夜、ホテル・ニューオータニでおこなわれた。お招きいただいた私にとっても、感慨深い一夜であった。

相変わらずお元気な鈴木鎮一先生と久しぶりにお話できたばかりでなく、鈴木静子先生や松井宏中先生など松本音楽院時代の先生方、それに私より年下で揃って優秀な生徒であった鈴木裕子さん、村上豊君らとほぼ二十五年の歳月を経て再会することもできた。松本音楽院時代から才能教育を支えてこられた関係者の方々の方にたいしても、改めて敬服せざるを得なかつたが、当夜は、戦後間もない頃の松本音楽院のフィルムも上映されて、想い出のなかの影絵のような残像が久方ぶりに色彩られたような気がした。

光栄にも私はレセプションでなにか挨拶

するよう指名を受けたのだが、さらに重ねて想い出の一端を本誌に書くよう青木謙幸先生から依頼された。

そのお申し出を有難くお受けしはしたものの、私はいささか当惑気味のまま今日にいたっている。その一つの理由は、そうした想い出話については、すでに五年前、一連の文章を求められるままに書いてしまったからである。ファイルを聞いてみると「私はヴァイオリン」(『文艺春秋』一九七四年三月号)、「松本音楽院のころ」(『信濃毎日新聞』一九七四年九月九日)、「鈴木鎮一先生・信念にもとづく音楽教育」(『教育ジャーナル』一九七四年十一月号)などの文章が出てきた。もう一つの理由は、私は松本音楽院のいわば第一期生ではあつたが、決して優秀な生徒ではなかつたし、私が初めて鈴木先生の門下に交わつたのは、たしか昭和二十二年の初頭、小学校四年生のときであつて、すでに才能教育の対象としては、ややはみ出した存在でもあつたからである。その頃、鈴木先生は、すでに江藤俊哉、山本恵子(故人)、豊田耕児、小林武史、健次兄弟、鈴木秀太郎といった国際級ヴァイオリニストを育てられ、そうした輝やかし

ことでした。とにかくすばらしい響きのホールで、百二十年前の建物ですが、木造の

大天井も釘をつかわず、木の組み合わせで出来ている、建築界の貴重な研究資料とのことです。正面には、立派な大パイプオルガンがついています。

四月四日、午前十時からは、ユタ・ホーレの集会室で、この地方の鈴木メソードの先生方の集まりが計画されており、五十名ほどの先生達と、鈴木メソードの教育法とその指導法の研究会を、お昼まで致しました。

そして午後二時過ぎ、ソルトレークの空港へ一同参りました。空港には、生徒達が泊めていただいたい家庭の皆さんが多数見送り、子供達も別れを惜しんで、泣いている子もいました。とにかく、温かく迎えられた、忘れられない思い出となることでしょう。

さて次は、生徒達の待望のロスアンゼルスです。翌五日は、午後に一同ディズニーランドへ遊びにゆく日なのです。ディズニーランドが六で、コンサートの演奏は四ぐらいの割合で、子供達は今回の旅行に出か

けたことと思います。

ロスアンゼルスでは、ミルズ先生御夫妻、コリーナ先生御夫妻、セロのバーバラ・ワルティモア・ホテルの大ホールで、三百人の生徒達の合同レッスンを松本の生徒達数迎えて下さり、嬉しい限りでした。

そして、五日の午前十時から、宿舎のビルテイモア・ホテルの大ホールで、三百



ディズニーランドにて

と共に行ないました。遠くはテキサス州からやってきた生徒や先生もありました。アメリカの生徒達の成長もまためざましく、音がとても立派になつたのは、うれしいことでした。先ず、エクレスのソナタから始まり、松本の子供達も一緒に弾いたりして、国際交流の、楽しい立派な演奏でした。アメリカの先生達の熱心な研究心には、すばらしいことと、いつも感心させられます。生徒や父兄や先生達で、大ホールも超満員、七百人ぐらいいの集まりでした。十時から十二時まで二時間、楽しくあれこれとグループ・レッスンをやりました。また中間で、清水なぎさちゃんのモーツアルトのファンタジーの演奏も皆さんに聞いてもらいました。大きな感動でした。とにかく、楽しくすばらしい時間でした。

どこでも、温かく心から皆さんに迎えられて、ほんとうに、鈴木メソードの音楽教育によつて強く結びつけられた国際友情の美しさと深さを、しみじみと知らされたすばらしい旅でした。

い成果のうえで、松本音楽院では前記の方々や山田鉢子さん、大池庸子さん、眞峰紀一郎君などの才能を育成しはじめていた。

私は、いさか年長であったこともあって、私たちが兄事していた「耕ちゃん（豊田耕児氏）」が鈴木先生からレッスンを受けるときの真摯な姿と、その莊厳なまでの音楽的雰囲気に圧倒されつつも、生半かな才能と技術では、いかに音楽が好きでも専門家の道を歩むべきではないことを、おのずと自覚させられたのである。私が本稿の執筆に戸惑いを感じた最大の理由は、ヴァイオリンの道を職業として選ばなかつた私が、才能教育について、これ以上、語るべきのをもち得ないという私自身の事情に由来するというべきであろう。

だが考えてみると、鈴木先生の才能教育は、ときにはそれが「天才教育」と誤解されることもあるにせよ、それは決してヴァイオリンの天才、音楽の専門家の育成のみを目的とするものでないことも自明であった。どんな子供でも自由に母国語が話せることは、どんな子供でもバッハやモーツアルトの音楽にみずから参加できること、い

わば音楽の普遍性を等しく万人に解放することに、鈴木先生の一貫した姿勢があつたのである。

とはいへ、こうした理想が個々人におい

て現実化するプロセスが決して安易なものではないことも、私があえて指摘するまでもない。想い起してみると、鈴木先生のレッスンは、先生の号令でボーリングを変化させたり、楽節を曲の途中から突然弾かせたり、そういったヴァイオリン・レッスンのゲームによって生徒を導びく手法においてユニークであり、興味のつきないものであつて、楽譜も重要なが、すべてを暗譜してはじめて音楽を自由にする、つまり自らに解放することができることを、知らず識らずのうちに教えてくださつたが、こうしたレッスンの反復はある意味で大変厳しい教育なのである。鈴木先生は、「ヴァイオリンは一日弾かない」と「一日退歩する」とよくいわれた。このようなくなき反復のなかに、音楽の偉大な精神を得させること、こうした方法を私自身の体験に引き寄せた。

しかし、こうした環境においても、そこに多くの問題が存在しないわけではない。今日では、ヴァイオリン人口もピアノ人口もわが国は幼時のお稽古事としては世界有数のものであるが、受験競争や管理社会での競争の激しさのためか、せつかく、そのようにして幼時からヴァイオリンやピアノに親しんでも、それを成人段階にまで持続させるのはなかなか困難なようで、私の周辺を見回してみても、職業として音楽の道を進ぶ者以外は、まず最初は高校生のころ、次にはせいぜい大学生のころまで終つてしまい、ひとたび中断すると、それま

や芸能を厳しく幼体にさすけるという「孟子」に発する「教育」という語の東洋的文脈においても、ラテン語の *educare* → *education* から *education* に連なる西洋的文脈においても、まさに本来的な意味における教育の本質につながり得るのである。

での厳しい日課の反動のためでもある、すつかり生活から遠い存在になってしまふことが多いようである。これは大変惜しいことであるばかりか、あえて大袈裟に表現すれば、一つの文化価値の内部的喪失であるような気がする。このことはちょうど、中学から大学まで十年以上も英語を学びながら、その英語が一般には実社会で役立たず、銷びついてしまうことが多いという現実と類似しているかも知れない。もつとも英語の場合には、わが国の一般の英語教育そのものに大きな問題があるのであって、才能教育の場合とは裏腹の関係にあるといえよう。

ともあれ、このあたりの問題をどう考えるのかが、才能教育を受けた者の将来の職業選択の問題とともに、すでに四半世紀を過ぎて膨大な才能教育人口を世に送り出した才能教育の、今日の段階における一つの問題点であるのかもしれない。そして、このように考えてくると、結局は、才能教育の受け手の側の主体性という問題になつてくるのではないか。もとより、これらの問題は一般に、わが国の教育のあり方そのものがもつ問題点とも相関的のこと

は、いまでもない。私自身、現在四人の子供をもち、ピアノ、ヴァイオリン、フルートを一応は習わせているが、研究生活のためしばしば外国で生活してみると、たとえば日本の場合、多くの母親はレッスンが終つて帰宅する子供にたいし、開口一番「今日はどこまで進んだの?」と質問するのにたいし、アメリカでは「今日は楽しかった?」と聞く。オーストラリアでは母親は、子供たちの将来の職業選択にまず第一の関心を示し、どんな学校へ進学するかは二の次で、学校は職業選択の道に沿つて選ぶのが普通である。

こうした問題点をふりかえりながら、いささか手前味噌になつて恐縮だが、そのための私自身の体験をここに書いてみよう。先にも記したように小学校四年生でヴァイオリンを始めた私は、豊田耕児氏のようないい存在を目のあたりにして、とうてい専門家の方を歩むことなどできないことを自觉していたが、深志高校一年生のときには、家業に起つた不幸な事情のため鈴木先生の許を離れて以来も、今日までヴァイオリンをもかくも続けている。先日のレセプションの壇上で再会を喜んで下さった鈴木先生

は、「明日、武道館で子供たちと一緒に弾けますか」とおどけた質問を浴びせられたが、従つて、決してうまくはないけれど、今でも自分が練習した曲は弾くことができた。たしかに、多忙にまぎれ、このところヴァイオリンを手にする日は少ないが、それでも大学生の頃はオーケストラでコンサート・マスターをやらされたり、大学祭に中野公会堂で独奏したりもした。

中学生の頃から絵も始めて、長野県展には毎年入賞したり、スポーツでは陸上競技(短距離)のキャブテンでもあつた私は、しかし、家業に起つた不幸を契機に大人の社会の醜悪な断面に接したためか、社会の動き、政治の動き、世界の動きに多感な少年の日々を過し、当時、中国革命間もない新生中国の胎動に目を開かれていた。そのような現代中国を研究してみたいと志向した私は、そのためにはまず言葉をと考へ、東京外国语大学で中国語を修めた。一時、学生運動のリーダーにもなつたが、やがて東大の大学院に進んで国際関係論を修得し、本格的に学問の道を歩むこととなつた。いまでも想い起すのは、ちょうど大學生のとき、いわゆる勤評闘争が起り、

若氣のいたりであろうか、当時の全学連オルグとして和歌山へ向ったが、その夜は、都民交響楽団の定期公演が日比谷公会堂であり、東京駅で演奏会用の服装を着がえ、ヴァイオリンを友人にあずけて列車に乗ったこともあった。

異例なことではあったが、すでに大学院時代に中ソ論争を直視して執筆した私の最初の著書『現代中国論』——イデオロギーと政治の内的考察』を青木書店から出版し、中国研究者としての道を進みはじめたとき、中国では文化大革命が起つた。激動の中国に自身飛んだ私は、上海で、紅衛兵の女の子のピアノ伴奏で『東方紅』を即興で弾いたが、文化大革命の時期に、このようないい体験をもち得たのはやはりヴァイオリンのお蔭であったと思う。外務省特別研究員として香港に留学したときは、シティ・ホールでの合奏が写真入りで現地の新聞に出て、いささか当惑した次第である。

今日では、たとえばウイーンでの国際会議に出かけたり、ソ連の科学アカデミーに招かれてモスクワに滞在したり、最近ではオーストラリア国立大学の客員教授として

キャンベラに滞在したりする機会ごとに、音楽会だけは欠かすことなく、また、十年來の懸案の研究を集成した私にとっては十冊目の著書『中ソ対立と現代——戦後アジアの再考察』を最近、中央公論社から出版したが、外国でこうした著作の完成に没頭するあい間に、ヴァイオリンはかけがえのない息抜きになつてゐる。

こうして、私はどうやらヴァイオリンをともかくも身近に置いているのだが、私が主任教授をつとめる私の大学の国際関係論のゼミナールに参加する学生のなかにも、語学を得意の学生と才能教育とは相関関係が高いのであるか、才能教育の体験者が何人かいるので、私は、しばしば彼らと合奏するという楽しみも得ることができる。

そして、私がいつも学生たちに向つて教えることは、まず語学から解放されく指導することは、まず語学から解放されること、そうして上手でなくともよいから、今日の国際関係なり、現代中国の動向なりを、自分の専攻語学と国際語としての英語表示ができるようになること、この関門を是非とも乗り切ることであるが、幸にして、

今では、そのような関門を見事に乗り切つた教え子たちが、あるいは国連の職員になつたり世界銀行に就職したり、あるいはコロンビア大学など海外の一流大学の大学院に進学したり、また、ジャーナリズムや企業の第一線に飛び立つて行つてくれるようになつた。

しかし、こうした成果は、私自身に照らしてみても、いずれも反復と持続以外にはなく、それは才能教育の根本と相通するものであろう。

才能教育の体験者がみずから将来を選択するに当つて考えるべき問題の一つは、結局、受け手の側の冷静な自己判定と、長期に亘る幼時の蓄積をいかに自分の生涯に活かすか、という点にあるといえるのかもしない。こうした問題点が自覚されつゝそれぞれの個性を活かす道が発掘されゆくとき、才能教育は二十世紀の人類が到達した現代の生きた文化遺産として、さらに大きな普遍性を獲得してゆくのではなかろうか。

お前が監督ならオレは大統領

在ニューヨーク 望月謙兒



小沢征爾氏

わざもがな、我が「鈴木指導法」に対する評価である。

私たちに、永年外国に住み着いている人間が故郷を振り返って見る場合、時たまそこで、腑に落ちない、不可思議な出来事に遭遇することがある。

それは、つい最近訪日したシンシンナチ、レッズの、対全日本野球戦績からもうかがえるように、こちらの大リーグで投げさせれば到底「使いもの」にならない一青二才投手の契約問題で、政治家を含めた日本中が大騒ぎを演ずるという珍現象もさることながら——もつともこの騒ぎなど、「日本は平和なんですよ」という証左とも受け取れないことはないし、むしろ慶賀すべきことかも知れないけれど——私自身の身近でその最たる例を挙げさせて貰えば、それは言

する度に決つて実感させられることの一つとして、「一体、あの演奏旅行が日本国内で可能であろうか」ということがある。訪問先各地の主催者との契約以外、一銭の寄付も仰がず、二十人近い一行の太平洋の往復旅費、その他の諸経費を差し引いても、なお赤字を出さないという事実は、この物価高の折全く唖然とさせられるし、日本国内であれば、さしすめ僅かな国内旅費の調達一つをとっても不可能であろう。即ち、

「子供を指導しろ」と言われても、とても鈴木先生の眞似は出来ないし、先生の足元にもおよばない」と。即ち、これらの先生方の批判は、特に幼児に対する鈴木指導法の長所は長所として、その威力とともに、十二分に認めた上で批判なのである。

とは申せ、当地ニューヨークのジュリアードの教授陣の中には、特にプロの見地から鈴木指導法に対する辛辣な批判者もかな

り存在する。その風当たりの強さたるやあたるべからざる勢いであるが、これらの教授連と激論をかわした私が、何故か後味の悪

くない、さわやかな気持を抱かせられるのは、私自身が、それらを「筋の通つた批判」として理解出来るという事実とは別に、そこにはもつと根本的な、確乎とした理由が存在する。「しかし……」と、この大先生がたは大論争の終りを必ず次の如くしめくるのである、「だからと云つて、私に

「子供を指導しろ」と言われても、とても鈴木先生の眞似は出来ないし、先生の足元にもおよばない」と。即ち、これらの先生方の批判は、特に幼児に対する鈴木指導法の長所は長所として、その威力とともに、十二分に認めた上で批判なのである。

もう一つ身近な例として、故斎藤秀雄先生門下の俊英、小沢征爾氏に対する評価が